

2021.7.20

Report from AKATSUKA PARK

赤塚公園武蔵野台地崖線植物モニタリング活動

「植物の動き」＝開花記録表を 8月～12月へ更新しました

1年間で開花が観察される植物の数

第4・第五月曜日を除く毎週月曜日に行っている「身近な自然の観察・記録活動 赤塚公園版（＝モニタリング）」は、素人の観察者にも取り組みやすいように開花している植物を見つけるのが基本の活動です。そして、その記録を集積したのが、赤塚公園サービスセンターのロビーに掲出している「植物の動き」の表です。

活動は2016年から始めて、昨2020年までの5年間の記録が蓄積されました。この5年間で、何種類ぐらいの植物の開花が確認されたのでしょうか？

赤塚城址 約 307 種

八丁目の林の周辺 約 158 種

大門地区 約 240 種 でした。

赤塚公園の全域にわたってすべての植物の生育を調査した他の記録では400種以上が確認されているので、モニタリングで見つけたこの数は決して大げさなものではありません。

各エリアは広さも環境も異なっているので、開花を確認できる植物の種数は異なってきます。

赤塚城址地区は「林」と「林縁＝林の裾に広がる明るい草原」のほかに、普通の「街路」も含まれたエリアなので、そこに生育している植物の種類は多くなっているのですが、ほとんど「街路」である八丁目の林の周辺でも年間に158種の植物の開花が観察されるのだから、都立赤塚公園のみどりの豊かさは特筆すべきことだと思います。

一覧表にして分かる5年間で消えた花、現れた花

観察・記録活動は植物の専門家ではないアマチュアが取り組み始めたものですから、活動開始から2年間ぐらいは観察眼が定まらず、記録できていない種もたくさんあります。開始3年目の2019年ぐらいから観察者の数も増えて複眼でものを見ることができ、また、植物に詳しい人の参加も得て、活動は充実してきました。今回掲出しているのは真夏の8月から冬に入った12月までの1年の後半5か月の植物の動きを追ったものですが、記録された種数も多くなり、細かい一覧表になってしまいました。見にくいのですが、これを眺めているといろいろなことが分かってきます。

まず、2020年に記録がない種がたくさんあります。新型コロナウイルス蔓延防止のために観察活動もあまり突っ込んで行わなかったことに加えて、東京都の赤塚公園生物多様性保全事業による整備工事が行われて生育環境がやや変わり、観察コースも少し変わったことが主な要因ですか

ら、来年にはまた観察できるでしょう。こうした人的要因以外でも、D-170 **アオミズ**のように5年前までは観察できたのに最近では見られなくなってしまった植物やその逆もあります。

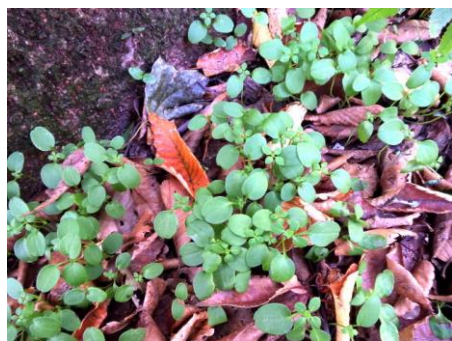
春の野草は、前年の11月から葉を広げている

大門地区を例にとって、植物の動きに注目してみよう。表の上の方（索引番号 60 あたりまで）の右側、つまり11月、12月の季節にはセル（枠）が薄緑色に塗られている植物がたくさんあります。つまり、真冬になる前に展葉（地上に葉を伸ばし始めること）している野草がたくさんあります。

D-007 **フラサバソウ**、D-011 **オオイヌノフグリ**、D-013 **ホトケノザ**、D-014 **ヒメオドリコソウ**、D-017 **ヤエムグラ**、D-018 **オドリコソウ**、D-020 **ジロボウエンゴサク**、D-021 **ムラサキケマン**、D-022 **セントウソウ**、D-023 **ヤブニンジン**などです。

☹️ アタマの体操でーす ☹️

10枚の写真は、上の植物の展葉したときの姿または開花する前の状態を順番に並べたもの。
と言われても「どれがどれだか・・・??」。
ゆっくり考えてください。



このうち「越年草」(1年だけ生きて、あとは種子が地上に落ちることによって世代をつないでいく1年草のうち、生育期間が人間の暦の12月から1月の年を越して活動している植物)はジロボウエンゴサクだけで、あとはほとんど多年草で、春を彩る代表的な野草です。わたしたちは「春の花は春に芽を出す」と思いこんできましたが、実際には、真冬になる前の前年の秋の終わりから春のための準備を始めているということなのです。だから、草花の多くが枯れる秋の時期の林の手入れは、これらの展葉を始めた野草たちが春の活動をしやすくなるために必要なことで、しかも注意深く行う必要があるということなのです。

開花期間が延びているということは暖かくなっているということ

今回掲出しているのは8月からの記録ですから、それぞれの種の開花が始まった時期は記録表ではわからないのですが、開花が終わる時期が後ろに延びている種がいくつか見受けられます。

D-067 **カタバミ**、D-088-2 **オッタチカタバミ**、D-006 **ダイコンソウ**、D-109 **ハキダメギク**、D-153 **シマスズメノヒエ**などですが、これらの夏または秋の暑い季節に咲いていた植物は、今では年間を通して開花するようになっている傾向が読み取れます。

また、2019年のD-012 **イヌムギ**のように、花が枯れて実を付けて、しばらくしてからまた開花するサイクルを年間で何回も繰り返す植物も見られるようになりました。D-089 **ドクダミ**も9月の終わりまで咲き残りが見られるようになりました。

樹木の葉が紅葉する時期にも変化が見られます。D-077-2 **イロハモミジ**、D-106 **ハゼノキ**、D-141-7 **カツラ**などは2020年では前年よりも遅くなっていました。

D-003 **ニリンソウ**は、多年草の中でも春の季節だけに地上に姿を現して、春が終わるころには地下生活に戻ってしまう「春植物」の代表的な野草なのですが、この数年来、12月に開花する「早咲きの特異株」のほかにも展葉・開花する株が目立ってきました。

「真冬がなかなか来ない」、「冬が暖かくなっている」「春が早く来る」という地球温暖化がわたしたちの暮らしの中に広がっているということです。しかし、地球温暖化は10年、20年の単位での環境変化ですから、この種の調査も何年も継続して行わなければ正確なことは分かりません。これからも出来るだけ続けていきます。

また、また
アタマの体操！



今度は上の植物から4種だけピックアップしました。順番どおりかわかりません。さて、「どれがどれだか・・・??」。



植物観察・記録活動(モニタリング)はどなたも参加できます。お問い合わせは都立赤塚公園サービスセンター
03-3938-5715